



ア ト リ エ
訪 問

第 4 回

草間彌生

前衛芸術家

ニューヨーク、ロンドン、リオデジャネイロ、上海……。
今、各国で草間彌生の個展が開催されている。
世界中から熱い視線が注がれる「水玉の女王」は、
日夜大きなキャンヴァスに向かい、制作に打ち込んでいるそうだ。
その現場へうかがった。

撮影 永野雅子

都心の住宅街に、コンクリートとガラスのモダンな3階建てのビルがある。「草間彌生スタジオ」——水玉の女王の秘密基地だ。スタッフに導かれて、2階のアトリエに入ると、色とりどりの作品に囲まれた草間さんがじっとキャンヴァスを見つめていた。声をかけることがためられるほどの、圧倒的な集中力で筆を走らせている。

——毎日、朝から夜までずっと描いておられるそうですね。疲れて投げ出したくなることはないのですか。
草間 ええと……、我慢しています（笑）。疲れますけど、死ぬまでもっともっといい仕事をしなければならぬと思っています。私は、この大きな絵を1～3日で仕上げます。そして、1枚描き終えたら、すぐ次の作品に取りかかります。アイデアがどんどん出てきますから。本当はこうしてインタビューを受けている間も制作したくてたまらないの。あの……ちょっとよろしいですか。（と言いながら、再び筆に絵の具を付け、描き始める。）

——下絵を描かずに作品に取りかかっていらっしゃるようですが、頭の中にイメージがあるのでしょうか。
草間 筆を持つと、手が勝手に動いていくんです。だからね、私の手に聞いてください（笑）。私は一度も作品を失敗したことがないんです。迷うこともない。すべて自分の思う



優しい声でささやくように話す草間さん。インタビュー中、自作の詩を朗読してくれた。



とおりにできあがってくるんです。不思議よね。

——素晴らしいですね。現在、取り組まれているのは、2009年より始まる「わが永遠の魂」という絵画シリーズですが、作品数はすでに200点を超えていると聞きました。

草間 私がいっぱい描くから、アトリエに作品の置き場所がなくなってしまって。実は、この近くに美術館を建てているので、そこにも所蔵しようと思っています。

今、私の作品は、いろいろな国の美術館に貸し出されていて、うちのス

タッフは世界中を飛び回っていますよ。私はここでずっと絵を描いているだけですが、彼らは外へ出て、私ができないことをどんどんやってくれています。スタッフは全員で9名いますが、25年以上いっしょに働いている人が3名います。みんな、私の影の仕掛け人なの（笑）。

——信頼するスタッフに囲まれて、制作への意欲も高まりますね。

草間 ええ。今までさまざまな苦労をしてきましたが、ここにきて、私の人生における芸術の力が集結して、一つになろうとしています。ですから、毎日一刻を惜しんで制作しなければならぬと思っています。

——草間さんの作品は、中学生に

とても人気があります。子どもたちにメッセージをお願いできますか。
草間 人間のすばらしさや宇宙の神秘など、すべてのことに興味をもって、絵でも小説でも何でもいからです。一生をかけて大きなメッセージを、世界中に伝えていってほしい。私は、自分が死んだ後も皆さんに見ていただけるように、全力を尽くして素晴らしい作品を残していこうと思っています。

私は子どもの頃から、将来、芸術家になりたいと思っていました。そして今もなお、「生まれ変わっても芸術家になりたい」と思っています。創作の力が私のすべて。だから、命がけで描き続けます。



絵の具をたっぷり付け、どんどん筆を走らせる。その動きに、迷いはまったくない。



画材は乾きの早いアクリル絵の具を使う。「でもね、乾くのが待ちきれないの」。



くさま・やよい
長野県生まれ。10歳の頃より水玉と網模様をモチーフに、幻想的な絵画を制作。1957年に渡米し、60年代後半には多数のハプニングを行う。73年に帰国し、小説、詩集も多数発表。2011年より大回顧展が、テート・モダン、ポンピドゥーセンターなど欧米4館で開かれ、大きな話題となった。12年より個展「永遠の永遠の永遠」(国立国際美術館、大阪)を開催。日本全国を巡回し(2013年11月2日～2014年1月13日)には、高知県立美術館で開催、記録的な入場者数となっている。